

子どものこころの診療センター

1. スタッフ

センター長 大藪 恵一

副センター長（兼）教授 2名

その他、准教授1名、講師1名、助教2名、医員2名
（助教は特任を含む）

2. 診療内容

昨今の報告では、日常生活や学校の場面でなんらかの支援を必要とする自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、学習障害などの「発達障害」は6.5%と推計されている。実際に日常生活に困難を抱え、当センターを受診される人は増加している。小児科領域だけでなく、成人期においても発達障害による適応障害やうつ病などの二次障害が近年注目を寄せている。当センターでは、小児科と精神科が共同して、18歳までの年齢の子ども・青年に対して、発達障害に起因する諸症状に対する評価・診断・指導・治療を行っている。

小児領域：自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、学習障害などの発達障害の診断と治療を行っている。発達障害は多様であり、必要な治療や支援は個々で異なる。そのため、診断だけでなく、どのような特性をもっているかの評価が重要である。全般的な発達の判定には、K式発達検査、WISC-IV、発達障害の診断には、自閉症診断の世界基準である自閉症診断観察評定（ADOS）、自閉症診断面談改訂版（ADI-R）を行なっている。さらに日常生活の様々なことをスムーズに遂行するための機能である実効機能評価も行っている。

発達障害は学習困難から不適応を生じ、不登校や問題行動に繋がることが多い。これらの不適応状態の原因を検索するために、学習障害のスクリーニングとして読み書きスクリーニングテストやフロスティック視知覚検査などを用いて評価し本人がどのような困難さを抱えているのかを明らかにし、支援につなげている。さらに、血液検査、頭部MRI、脳波検査、脳磁図検査などを行い、基礎疾患の検索と症状に対応する脳機能の同定をおこなっている。

評価・診断の後、客観的根拠を提示しながら子どもの特性について養育者に説明し、関わり方の指導、学校等との連携を行っている。必要に応じて投薬治療も行なっている。

また、希望者には、心理士によるペアレント・トレーニング、親子の心理カウンセリング、子どもへのソーシャルスキルトレーニング、応用行動分析（ABA）による療育指導などを、自費診療の枠組で行っている。

また、発達障害児は高頻度で睡眠障害を合併する。睡眠治療で注意欠如多動症症状が改善するケースもあるため、睡眠医療センター／小児科の睡眠外来と協働で睡眠の精密診断と治療を行なっている。

3. 診療体制

(1) 外来診察スケジュール

小児科

月曜 午後 初診

水曜 午前・午後 再診

金曜 午前 再診

精神科

月曜 午前・午後

水曜 午前・午後

木曜 午前・午後

金曜 午前

(2) 検査

小児科

K式発達検査、WISC-IV、バウム検査、人物描画検査、ADOS、ADI-R、実効機能評価、言語機能評価、Vineland 適応行動尺度、sensory profile、フロスティック視知覚検査、M-ABC、視線計測、終夜睡眠ポリソムノグラフィー

精神科

WAIS-III、WISC-IV、AQ、ASRS、PARS、ロールシャッハテスト、バウムテスト、SCT、MMSE、ADAS

4. 診療実績

(1) 外来診療

小児発達障害外来は地域医療福祉ネットワークから予約を取っていただく保健診療枠以外に、養育者から直接アクセスで申し込んでいただく自費診療枠を設定している。

小児科

初診患者数 205名：

内訳は自閉症スペクトラム障害 198名、注意欠陥多動性障害 53名、学習障害 9名、チック 7名、不安障害 2名、強迫性障害 2名、場面緘黙 2名、家庭内暴力 2名（重複含む）。

パッケージ入院 4名

精神科

初診患者数 44名

入院患者数 10名

(2) 自閉症に対するパッケージ入院精査指導プログラム

小児では外来では難しい頭部MRI検査をはじめ、脳波・血液検査などの医学的検査及び、ADOS、ADI-Rなどの自閉症精密評価検査、視線計測、発達性協調運動評価(M-ABC)、読み書きスクリーニングテスト（学習障害の評価）及びそれらに基づいた療育指導を連続で行うパッケージ入院をおこなっている。